2016 年度　研究センター事業報告書

研究センター名	間文化現象学研究センター
研究センター長名	谷　徹

Ⅰ．研究成果の概要

本欄には、研究センターの実施した研究の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、項目立てなどをおこないできるだけわかりやすく記述してください。

今年度(2016 年度)は、昨年度(2015 年度)に採択された科研費プロジェクトと連動して、その重点研究目標である「エコノミーと間文化性」を軸にした研究目標が設定されていた。

その具体的な研究展開に関しては、

① 若手研究者の企画による「国際若手発表会」を 7 月に開催した。この際、ドイツ、フランスから 2 名の研究者(エリーズ・コリロー、ミヒャエル・シュタードラー(いずれもウィーン大学))を招待し、センターのメンバー5 名(桝川耕平、有村直輝、酒井麻衣子、小田切健太郎、鈴木崇志)とともに、研究発表・討議を行った(本学衣笠キャンパス)。

② 過去にも本学で講演していただいたジゼル・ベルクマン氏の講演会を 11 月に開催した(本学衣笠キャンパス)。

③ 中国・広州の中山大学および本学人文科学研究所と連携して、「東アジア間文化現象学会議」を 11 月に開催し(本学衣笠キャンパス)、双方からの研究発表と討議を行った。この成果は、2017 年に人文研紀要の特集号で公刊される予定である。

④ 日本ミシェル・アンリ研究会と連携して、シンポジウム「ミシェル・アンリ哲学の地平を拓く」を 12 月に開催した(本学衣笠キャンパス)。

⑤ 間文化現象学ワークショップ「エコノミーと間文化性」を 2017 年 3 月に開催した(発表者:亀井大輔、佐藤勇一(福井工業高等専門学校・准教授) 藤岡俊博 (滋賀大学経済学部・准教授))(本学衣笠キャンパス)。

⑥ 国際シェーラー学会会長のグイド・クジナート氏の講演会「人間における〈再生への渇望〉―マックス・シェーラーとともに感情の共有(Sharing Emotions)と他者の現象学を考える―」を、3 月に開催した(本学衣笠キャンパス)。

⑦ 「立命館大学人文化学研究所紀要 №112」に、メンバー(加國尚志、酒井麻衣子、川崎唯史、松葉類)がこれまでの研究成果の一部を公刊した(2017 年 3 月刊行)。

これらによって、今年度の研究目標は十分に達成されたと言えるだろう。

Ⅱ． 拠点構成員の一覧

本欄には、2017 年 3 月 31 日時点で各拠点にて所属が確認されている本学教員や若手研究者・非常勤講師・客員研究員等の構成員を全て記載してください。

※若手研究者とは、立命館大学に在籍する以下の職位の者と定義します。

①専門研究員・研究員、②補助研究員・RA、③学振特別研究員（PD・RPD）、④博士後期課程院生・一貫制博士課程3回生以上に在籍する院生

役割		氏名	所属	職位
センター長		谷 徹	文学部	教授
運営委員		北尾宏之	文学部	教授
		伊勢俊彦	文学部	教授
		加國尚志	文学部	教授
		林 芳紀	文学部	准教授
		亀井大輔	文学部	准教授
学内教員 （専任教員、研究系教員等）				
学内の若手研究者	専門研究員・研究員			
	補助研究員・リサーチアシスタント			
	学振特別研究員 （PD・RPD）	鈴木崇志		学振PD
	博士後期課程院生・一貫制博士課程 3 回生以上在籍院生	松田智裕	文学研究科	博士課程後期課程 3 回生
		横田祐美子	文学研究科	博士課程後期課程 3 回生
		有村直輝	文学研究科	博士課程後期課程 2 回生
		小田切建太郎	文学研究科	博士課程後期課程 2 回生
		桝川耕平	文学研究科	博士課程後期課程 2 回生
		酒井麻依子	文学研究科	博士課程後期課程 1 回生
その他の学内者 （非常勤講師・研究生・研修生等・博士前期課程院生等）		神田大輔	文学部	非常勤講師
		青柳雅文	文学部	非常勤講師
		小林琢自	文学部	非常勤講師
		田邉正俊	文学部	非常勤講師
		黒岡佳柾	文学部	非常勤講師
客員協力研究員		池田裕輔	東京大学人文社会系研究科	特別研究員
		佐藤勇一	福井工業高等専門学校	准教授
その他の学外者 （他大学教員・若手研究者等）				
研究所・センター構成員　　計 20 名 （うち学内の若手研究者 計 7 名）				

5. 研究業績

本欄には、「実施体制」に記載した研究者の研究業績のうち、本プロジェクトに関わる研究業績を全て記載してください。(2017 年 3 月 31 日時点)

1．著書

No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	その他編者・著者名	担当頁数
1	Toru Tani	Kontexte des Leiblichen	共著	2016 年 7 月	Verlag Traugott Bautz GmbH	Cathrin Nielsen, Karel Novotný, Thomas Nenon	S. 251-274
2	谷　徹(訳)	『内的時間意識の現象学』	単独訳	2016 年 12 月	筑摩書房（ちくま学芸文庫)	エトムント・フッサール（著)	668 頁
3	谷　徹	『生命と死のあいだ　臨床哲学の諸相』	共著	2017 年 1 月	河合文化教育研究所	木村敏・野家啓一・内海健（編)	21-66 頁
4	Toru Tani	Philosophie im gegenwaertigen Japan	共著	2017 年 3 月	IUDICIUM Verlag GmbH	Hans Peter Liederbach (Hrsg.)	S. 74-93
5	加國　尚志	『沈黙の詩法――メルロ＝ポンティと表現の哲学』	単著	2017 年 3 月	晃洋書房		1-237 頁
6	加國　尚志 亀井　大輔 佐藤　勇一 黒岡　佳柾 （訳）	『メルロ＝ポンティ哲学者事典　第三巻』	共訳	2017 年 2 月	白水社	モーリス・メルロ＝ポンティ（著） 加賀野井秀一・伊藤泰雄・本郷均・加國尚志監訳	23-39 頁 40-51 頁 52-57 頁 80-95 頁 114-124 頁 324-343 頁 408-422 頁
7	亀井　大輔（訳）	『獣と主権者 II（ジャック・デリダ講義録)』	共訳	2016 年 6 月	白水社	ジャック・デリダ（著）西山雄二・荒金直人・佐藤嘉幸（訳）	91-156 頁
8	亀井　大輔 松田　智裕	『終わりなきデリダ　ハイデガー、サルトル、レヴィナスとの対話』	共著	2016 年 11 月	法政大学出版局	齋藤元紀・澤田直・渡名喜庸哲・西山雄二（編)	4, 9-41 頁 155-174 頁

2．論文

No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌、巻・号数	その他編者・著者名	担当頁数	査読有無
1	谷　徹	「あいだであう――生命の実在？」	単著	2016 年 10 月	『現代思想』11 月臨時増刊号、第 44 巻 20 号、青土社		143-160 頁	無
2	谷　徹	「文明・文化と「五」」	単著	2017年3月	『文明と哲学』第 9 号、公益財団法人日独文化研究所		119-138 頁	無
3	加國尚志	「生と死のあいだ–臨床哲学と医学的人間学」	単著	2016 年 10 月	『現代思想』11 月臨時増刊号、第 44 巻 20 号、青土社		186-207 頁	無
4	亀井　大輔	「真理と痕跡――デリダとハイデガーの〈アレーテイア〉」	単著	2016年6月	『アルケー』第 24 号、関西哲学会		15-28 頁	無
5	亀井　大輔（訳）	「近接と対立――モーリス・ブランショ『明かしえぬ共同体』の試練にかけられるジャック・デリダとジャン＝リュック・ナンシー――」	共訳	2017年3月	『人文学報　フランス文学』513-515 号、首都大学東京大学院人文科学研究科	ジゼル・ベルクマン（著） 市川博規（訳）	181-202 頁	無
6	池田　裕輔	「オイゲン・フィンクの現象学的カント解釈について（前編)」	単著	2017年3月	『立命館哲学』第 28 集、立命館大学哲学会		61-86 頁	有
7	鈴木　崇志	「他者経験の表現とその倫理的当為：フッサールの伝達の現象学に関する一考察」	単著	2016 年 10 月	『実践哲学研究』第 39 号、京都倫理学会		33-58 頁	無

8	鈴木　崇志	「『論理学研究』第4研究における鏡映の比喩について」	単著	2016 年 11 月	『現象学年報』第32号、日本現象学会		129-136 頁	有
9	鈴木　崇志	「フッサールの他者経験の理論における三つの「出会い」」	単著	2017年3月	『フッサール研究』第14号、フッサール研究会		82-103 頁	無
10	鈴木　崇志	「1921 年以降のフッサールの伝達の理論の展開」	単著	2017年3月	『倫理学年報』第66集、日本倫理学会		（未確定）	有
11	小田切建太郎	「初期ハイデガーにおける関心の中動態」	単著	2017年3月	『立命館哲学』第28集、立命館大学哲学会		87-108 頁	有
12	松田　智裕（訳）	「差異の問い――デリダとハイデガー」	共訳	2017年3月	『知のトポス』第12号、新潟大学大学院現代社会文化研究科「世界の視点をめぐる思想史的研究」プロジェクト	フランソワーズ・ダステュール（著） 宮﨑裕助（共訳）	91-131 頁	無
13	松田　智裕（訳）	「ジャン＝リュック・ナンシーの「キリスト教の脱構築」をめぐって」	単独訳	2017年3月	『人文学報　フランス文学』、513-515 号、首都大学東京大学院人文科学研究科	ジャン＝リュック・ナンシーほか（著）	81-120 頁	無
14	横田祐美子（訳）	「変容、世界」	単独訳	2017年3月	『人文学報　フランス文学』、513-515 号、首都大学東京大学院人文科学研究科	ジャン＝リュック・ナンシー、ボヤン・マンチェ（著）	29-52 頁	無
15	横田祐美子（訳）	「世界の欲望――ジャン＝リュック・ナンシーと存在論的エロス」	単独訳	2017年3月	『人文学報　フランス文学』、513-515 号、首都大学東京大学院人文科学研究科	ボヤン・マンチェ（著）	203-225 頁	無
16	酒井麻依子	「メルロ=ポンティにおける嫉妬と愛」	単著		『立命館大学人文科学研究所紀要』、112号、立命館大学人文科学研究所		45-70 頁	有
17	田邉　正俊	「「文化」と「文明」の相克――ニーチェ哲学における「文化」の"二面性"を手がかりとして――」	単著	2017年3月	『文明と哲学』第9号、公益財団法人日独文化研究所		171-189 頁	有
18	佐藤　勇一	「ミシェル・アンリ哲学における宗教思想家としてのカフカ」	単著	2016年6月	『ミシェル・アンリ研究』第6号、日本ミシェル・アンリ哲学会		111-132 頁	有
19	佐藤　勇一	「マーティン・ジェイにおけるルーメンとルクス：『うつむく眼』とヴァスコ・ロンチの『光学』の差異を通じて」	単著	2016 年 12 月	『福井工業高等専門学校研究紀要. 人文・社会科学 』第50号、福井工業高等専門学校		23-34 頁	有
20	黒岡　佳柾	「ハイデガーとデカルトの遺産」	単著	2017年3月	『立命館大学人文科学研究所紀要』、112号、立命館大学人文科学研究所		91-110 頁	有

３．研究発表等

No.	氏名	発表題名	発表年月	発表会議名、開催場所	その他発表者名
1	Toru Tani	Body, Language and Mediality	2016年5月	“Embodiment. Phenomenology East/West”, Freie Universität Berlin	
2	谷　徹	媒体性の現象学的形而上学	2016年9月	土井道子記念京都哲学基金「形而上学と現象学」、京都ガーデンパレス	
3	谷　徹	私は思考しうるか？	2016年12月	河合臨床哲学シンポジウム「人称――その成立とゆらぎ」、東京大学、弥生講堂一条ホール	シンポジスト：清水光恵・森一郎・斎藤環・谷徹、司会・コメンテーター：内海健・野家啓一、全体討論：木村敏
4	加國尚志	「抽象芸術と感情―アンリの生の現象学とリオタ	2016年6月	龍谷大学大阪梅田キャンパス	

		ールの崇高−前衛論から」			
5	加國尚志	「キアスム、非連続の連続—西田哲学と後期メルロ＝ポンティ存在論の接するところ」	2016 年 7 月	明治大学駿河台キャンパス	
6	亀井　大輔	「第 3・4 回のまとめ」	2016 年 7 月	Workshop『獣と主権者 II』を読む、東京大学	
7	亀井　大輔	「『<他者>の逆説』コメント」	2016 年 9 月	吉永和加著『〈他者〉の逆説：レヴィナスとデリダの狭き道』合評会、同志社大学	
8	亀井　大輔	「エコノミーと戦略」	2017 年 3 月	間文化現象学センター・ワークショップ「エコノミーと間文化性」、立命館大学	
9	Takashi Suzuki	“Strukturen des Zusammenkommens bei Husserl”	2016 年 7 月	立命館大学「間文化現象学研究センター」主催《国際若手発表会》、立命館大学	
10	鈴木　崇志	「フッサールの「生の歴史」概念の成立過程」	2016 年 10 月	関西哲学会第 69 回大会、大阪大学	
11	Kentaro Otagiri	“Was heist heute das Wohnen im “Haus”?“	2016 年 7 月	立命館大学「間文化現象学研究センター」主催《国際若手発表会》、立命館大学	
12	Tomohiro Matsuda	"Derrida's "New Ontology." Status of the Word "Ontology" in his early Works	2016 年 6 月	Derrida Today Conference, University of London, Goldsmith.	
13	Tomohiro Matsuda	"Pourquoi s'agit-il de l' "existence"：autour de la facticité et de l'ontologie chez Derrida"	2016 年 6 月	Le centre d'Études mulitculturelles, Maison du Japon, Paris	
14	Yumiko Yokota	"La question du derobement chez Bataille et Derrida"	2016 年 6 月	Centre d’ Etudes Multiculturelles de la Maison du Japon, 10eme Conference academique de jeunes chercheurs, deuxieme session, Maison du Japon, Paris	
15	横田祐美子	「バタイユにおける思考のエロティシズム」	2016 年 7 月	表象文化論学会第 11 回大会、立命館大学	
16	横田祐美子	「バタイユ、ハイデガー、ナンシーに おける根拠の問い——『無為の共同体』に基づいて——」	2017 年 3 月	日仏哲学会 2017 年春季大会、立命館大学	
17	Maiko Sakai	“Violent Coexistence in Merleau-Ponty”	2016 年 7 月	立命館大学「間文化現象学研究センター」主催《国際若手発表会》、立命館大学	
18	酒井麻依子	「ソルボンヌ講義における対人関係の病理——「アバンドニック」を中心に」	2016 年 9 月	日本メルロ=ポンティ・サークル第 22 回年次大会、 日本大学通信教育部	
19	Kohei Yanagawa	“Interculture in Husserl’s Theory of Time”	2016 年 7 月	立命館大学「間文化現象学研究センター」主催《国際若手発表会》、立命館大学	
20	Masafumi Aoyagi	“Enlightenment and Interculturality: Dialectical Culture and Inter-cultural Experience”	2016 年 8 月	The 3rd Conference on Contemporary Philosophy in East Asia SNU Institute of Philosophy, Seoul	
21	青柳　雅文	「文化の弁証法と間文化性——ホルクハイマー、アドルノの『啓蒙の弁証法』を手がかりとして——」	2016 年 11 月	東アジア間文化現象学会議、立命館大学	
22	佐藤　勇一	「エコノミーと自然法をめぐる間文化的考察—モンテーニュの新大陸とケネーの中国——」	2017 年 3 月	間文化現象学センター・ワークショップ「エコノミーと間文化性」、立命館大学	

４．主催したシンポジウム・研究会等					
No.	発表会議名	開催場所	発表年月	来場者数	共催機関名
1	国際若手発表会	衣笠キャンパス	2016 年 7 月	20 名	
2	ジゼル・ベルクマン氏講演会	衣笠キャンパス	2016 年 11 月	30 名	
3	東アジア間文化現象学会議	衣笠キャンパス	2016 年 11 月	20 名	中山大学（中華人民共和国）、立命館大学人文科学研究所
4	シンポジウム「ミシェル・アンリ哲学の地平を開く」	衣笠キャンパス	2016 年 12 月	20 名	日本ミシェル・アンリ哲学会
5	ワークショップ「エコノミーと間文化性」	衣笠キャンパス	2017 年 3 月	25 名	
6	グイド・クジナート氏講演会	衣笠キャンパス	2017 年 3 月	25 名	

５．その他研究活動（報道発表や講演会等）				
No.	氏名	研究業績名	発表場所等	研究期間
1	佐藤　勇一	「第 5 回国際現象学会（パース）」（国際学会報告）	『現象学年報』第 32 号、日本現象学会、189-193 頁	

６．受賞学術賞					
No.	氏名	授与機関名	受賞名	タイトル	受賞年月
1	小田切建太郎	日本現象学会	研究奨励賞		2016 年 11 月

７．科学研究費助成事業						
No.	氏名	研究課題	研究種目	開始年月	終了年月	役割
1	加國尚志	間文化性の理論的・実践的探求――間文化現象学の新展開	基盤研究（B）	2014 年 4 月	2018 年 3 月	代表
2	谷徹	間文化性の理論的・実践的探求――間文化現象学の新展開	基盤研究（B）	2014 年 4 月	2018 年 3 月	分担
3	亀井大輔	間文化性の理論的・実践的探求――間文化現象学の新展開	基盤研究（B）	2014 年 4 月	2018 年 3 月	分担
4	北尾宏之	間文化性の理論的・実践的探求――間文化現象学の新展開	基盤研究（B）	2014 年 4 月	2018 年 3 月	分担
5	林芳紀	間文化性の理論的・実践的探求――間文化現象学の新展開	基盤研究（B）	2014 年 4 月	2018 年 3 月	分担
6	佐藤勇一	間文化性の理論的・実践的探求――間文化現象学の新展開	基盤研究（B）	2014 年 4 月	2018 年 3 月	分担

８．競争的資金等(科研費を除く)						
No.	氏名	研究課題	資金制度・研究費名	採択年月	終了年月	役割
該当無し						

９．知的財産権								
No.	氏名	名称	出願人区分	発明人区分	出願番号	公開番号	登録（特許）番号	国
該当無し								